# ハイスクール・スターフェスティバル

藤原ライラ

「一緒に帰ろっ、亮助」
　じっとりと湿気を含んだ空気が淀む七月の教室に、千代の声はやけに調子外れに、快活に響いた。
　夏休み前の最終関門、期末テストの最終日。誰もが溢れる開放感に浸りながらどことなく気だるい影を宿しているのに、千代だけは本当に元気だった。高い声がぼんやりとかすんだ頭にかき氷のようにキンキンと響く。
「別にわざわざ誘わなくても、帰る方向は一緒だろうが」
　おれはぺったんこの鞄を持って立ち上がった。ろくに勉強もしていないし、そしてする気もないので、今日も鞄は軽い。代わりにおれの心が重く沈む。ああ、呪わしき赤点。ああ、恐ろしき赤点。
「今日は寄るところがあるの！」
　千代はそう言って乱暴におれの手首を掴むと、すたすたと大股で歩き出した。その度に結わえたツインテールがゆらゆらと揺れた。千代の手は随分と小さくて、冷たかった。
　こうやって手を引かれて歩くのはいつ振りだろう。もっと小さかった頃はずっとこうしていたのに。
　そう思って、おれは振りほどくのは容易なそのか細い手に身を任せた。

　幼馴染。腐れ縁。馴れ合い。
　おれと千代の関係を表す言葉は大体がそんなもので、どれもこれも正しいようでどれもこれも正しくないような気がする。
　家が近かったから自然と仲良くなって、一緒の小学校に行って、一緒の中学校に通って。高校もたまたま一緒になった。他に何もない。ついでに言っておくと、幼稚園の時、「大きくなったら結婚しようね！」などと嬉し恥ずかしな約束をしたとかいうこともない。
　「付き合ってると思ってた」そう言われたこともある。おれ自身も言おうとしたことが一度もなかったわけじゃない。ただタイミングが悪かったというか、なんというかおれに甲斐性がなかったのかもしれない。一緒に居る時間が長くなればなるほど、それは手放し難いものになって、壊れることがただ恐ろしかった。
「これ、書いて帰ろうよ」
　運動場の隅までたどり着いて立ち止まった千代は、嬉しそうに指さして言った。
　ああ、もうそんな季節か。
　笹が、生ぬるい風に吹かれていた。
　そのか細い枝が折れそうに見えるぐらい沢山の、色とりどりの短冊をぶら下げて。
　笹の葉、さらさら。
　そんな歌があったけれど、本当にさらさらというのだ。風が吹くたび、短冊が擦れて。
「うっわー、これ『ヱヴァンゲリオン初号機に乗れますように』とか書いてあるぞ」
「こっちはね、『美人で巨乳の彼女ができますように……。　１Ｄ男子一同』だって」
「ちょっと、それは。是非おれも混ぜてくれないか！」

「……やっぱり亮助も巨乳が好きなのね、ふん」
　興味本位で見てみると出るわ出るわ。青春真っ盛り高校生の醜い欲望の数々。
　『マツケン似でアニオタのカレシができますように』
　こりゃまたピンポイントだなぁ。ってマツケンって松平健じゃないよな？
　『嵐のコンサートに行けますように』
　さすがはジャニーズ。なんやかんや人気なんだな。
　『地位と名声のある四十代イケメンと結婚できますように』とかいうのもあった。いや、地位と名声は欲しいかもしれないけど、四十はないだろ、四十は。
「はい、亮助の」
　短冊に夢中になっていたおれに、千代がまだ何も書いていない水色の短冊を差し出した。ご丁寧に笹の横に置いてあるのだ。おれは黒のマジックのふたを弄びながら何を書くか考えた。すなわち『赤点がありませんように』にするか『彼女ができますように』にするか。千代の前で『彼女ができますように』と書くのも我ながらどうかと思うけれど。
「あ、亮助は『千代がずっと幸せでいられますように』って書いてね」
　おれがやはり赤点の恐怖は逃れ難いと思ってペンを走らせようとした途端、千代はしれっと言った。
「はぁ？　なんでおれがそんなこと書かなきゃいけないんだよ」
「わたしに幸せになってほしくないの？」
　上目遣いにそう言って、またにっこり笑う。こいつ絶対分ってやってるだろ。
　ただ「幸せ」という言葉はおれと千代の間に一番しっくり来る気がした。ただ関係性だけを連ねた言葉とは違って。
　「好き」だとかいうのはよく分らなくて、「愛してる」だとか勿論言えるはずもなかった。ずっと一緒にいた。それだけだ。でも、幸せではあってほしい。たとえここじゃなくても、どこかで。
　千代にはいつも、笑っていてほしかった。
「ああ、分ったよ。書けばいいんだろ、書けば」
　わざと雑な字でさっと書きあげて、おれは『リア充爆発しろ！』の短冊に隠すように、水色の短冊を笹にくくり付けた。
「で、おまえはなんて書くんだ？」
　千代はピンクの短冊に覆いかぶさるようにして書いている。覗きこもうとすると、ものすごい形相で睨まれた。
「だめ！　願い事は書き終わる前に見られたら叶わないんだから」
　それは願い事は言ったら叶わない、じゃなかったか？
「いいだろ、どうせつるすんだし。公開処刑同然だぜ？」
「いいから、だめったらだめ！！」
　あんまり千代が言うもんだから、おれはすごすごと引き下がり書き終わるのを待つことにした。なんだよ、人には自分の幸せを願わせておいて。

　そもそも、自分の恋路すら満足に叶えられなかった織姫と彦星に願ったところで一体何が叶うというんだろうか。七夕は別に願望成就の日じゃない。ただ長い一年間の中で、たった一度天の川なるものを渡って可哀想な恋人たちが会うことができる、それだけなのだ。
　それでもおれたちは願うのだ。遥か遠く輝く星に。
　無力で臆病な自分を差し置いて。
「よし、書けた」
「それじゃあ、帰るぞ」
　千代は満足そうな顔をして短冊を結んだ。おれがくくり付けた位置よりも少し低い位置に。
　おれはくるりと背を向けて歩き出そうとする。
「……これでさ、」
　すると、やけに大きな声で千代が言った。
「わたしたち二人とも,」
　はにかんだように千代が笑う。さっきまでの笑顔とは違って、どこかふわふわとしたような、不安そうな。悲しい時に笑うのと、少し似てる。よく見れば、耳まで真赤だ。
　おれの汚い字とはうってかわって、読みやすい字で千代の短冊は書かれていた。一目で女の子が書いたと分るような、ちょっと丸い文字。
「幸せになれると思わない？」
　潤んだような黒い瞳がおれを見つめる。おいおい、これは反則だろう？
　織姫と彦星もびっくりの乙女心である。
　甲斐性なしのおれが叶うはずもない。

　千代の短冊には『亮助がずっと幸せでいられますように』と書かれていた。

　愛だとか恋だとか、やっぱりよく分らない。でも、互いの幸せを自分の幸せのように願えたら、何よりも自分の幸せを願ってくれる人がいたらなんて素敵なことだろう。
　夜空の星なんかよりも、ずっとずっと綺麗だとおれは思った。
「ああ、昔からおれは幸せだったよ」
　おまえがいたから、は言わないことにする。
　おれは、俯いた千代の頭をわざと思いっきりくしゃくしゃに撫でた。